

審査の結果の要旨

氏名 猪股 悟

猪股 悟は「二環性ニトロソアミンが引き起こすトランスニトロソ化反応の機構研究」を論文題目とし、以下の研究をおこなった。

一酸化窒素($\cdot\text{NO}$)の恒常的な濃度は諸説あるが 30 pM 程度という見解がある。一方で、S-ニトロソ化合物(SNO 化合物)は nM~ μM レベルの濃度で存在するが調べられている。これは SNO 化合物が $\cdot\text{NO}$ を貯蔵する役割を担っていることを示唆する。

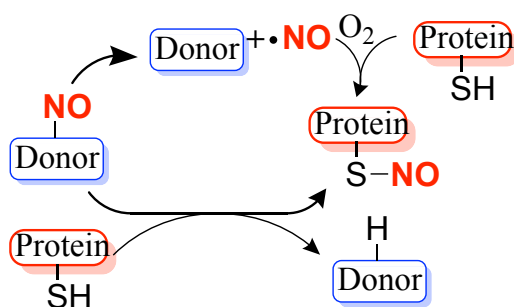


Fig. 1. S-nitrosation pathways.

近年になってタンパク質の S-ニトロソ化(SNO 化)は $\cdot\text{NO}$ の貯蔵だけでなくタンパク質の機能制御やシグナル伝達に重要な役割を持つことが明らかになってきている。この SNO 化を引き起こす NONO-ate などの NO ドナーによる S-NO 化はドナーの自発的分解により放出された $\cdot\text{NO}$ が酸素により酸化され生成する NO^+ がチオール(RSH)と反応する経路と $\cdot\text{NO}$ を放出することなく直接 NO 基のやりとりによって S-NO 化する、トランスニトロソ化反応と呼ばれる経路の 2 つがあり (Fig. 1)、区別は困難である。特にトランスニトロソ化はタンパク質間でも起き、しかも酵素様の基質・残基特異的な反応である可能性がある。そのためトランスニトロソ化反応の性質や機構は極めて重要である。しかし、SNO 化合物の不安定性や NO ドナーの SNO 化反応の経路の複雑さもあり、S-トランスニトロソ化反応の機構は未だに詳しく調べられていない。一方で、二環性ニトロソアミン **1** は $\cdot\text{NO}$ を放出せずトランスニトロソ化によってのみ S-NO 化を引き起こす (Fig. 2)。

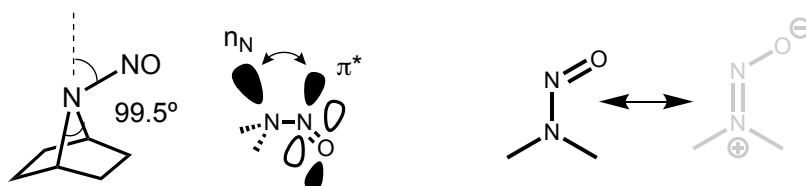


Fig. 2. Structural feature of bicyclic nitrosamine.

二環性ニトロソアミンの N-NO 結合が構造的な要因で非平面化しており、N-N 間の二重結合性が弱まっているために起きる、二環性ニトロソアミンに特徴的な反応である。この二環性ニトロソアミンと S-NO 化体が例外的に安定なトリフェニルメタンチオール (Ph₃CSH) を用い、生体内のトランスニトロソ化反応のモデル反応系を構築し、トランスニトロソ化反応の機構や化学的特徴を調べることを目的とした。加えて、二環性ニトロソアミンは波長 450 nm 付近の光で分解して・NO を放出することが分かっている。トランスニトロソ化反応の速度と光照射による・NO 放出量に相関があるか、それに N-NO 間の結合強度は関係するかも合わせて調べた。

トランスニトロソ化反応の研究

基質のデザインと合成 二環性ニトロソアミンは次の通りに合成した。

Diels-Alder 反応の際に、反応温度を室温(~20°C)で行うと *endo* イミド体のみが、120°C で行うと *exo* イミド体が優先して生成した(*exo*:*endo*~10:1)。次いで NBS による酸化的脱ベンジル化の後にニトロソ化することで各種の配向性・置換基をもった二環性ニトロソアミンの合成を達成した。

トランスニトロソ化反応の機構解析

トランスニトロソ化反応の反応速度式を CHCl₃ 中、二環性ニトロソアミン **2, 6** と Ph₃CSH を用いて初速度法で決定したところ、ニトロソアミンが 1 次、チオールが 1 次の 2 次反応 ($V = k[\text{nitrosamine}][\text{thiol}]$) であり、S_N2 反応の速度式と一致した。すなわちニトロソアミンとチオールの濃度に反応速度が比例する S_N2 様の反応であることが推察される。合わせて生成物である Ph₃CSNO の分解速度を測定したところ、極めて小さく分解速度を無視してよいことが分かった。一方で、アセトン、酢酸エチル、DMSO などを溶媒に用いて同様のトランスニトロソ化反応を行ったところ、全く反応が進行しなかった。次に二環性ニトロソアミンに含まれるイミド窒素上の置換基 R の置換基効果とイミド基の配向 (*endo/exo*) が及ぼす反応速度への効果を調べた。いずれの置換基 R においても *exo* イミド体は *endo* イミド体よりもトランスニトロソ化反応が速いことが分かった。

またイミド上の置換基 R の効果は *endo* 体ではほとんどないが、一方で *exo* 体では R として大きな置換基 ^tBu を導入すると **2** と比べ顕著に反応速度が遅くなった。*exo* イミド体では置換基 R が反応点のそばに位置し、立体障害によって反応性を低下させるためであると考えている。*endo/exo* 配向によるトランスニトロソ化の反応速度の違いを探るため、Eyring プロットを二環性ニトロソアミン **2, 6** で行った。DFT 計算(B3LYP/6-31+G*)によって遷移状態を探索した結果 *exo, endo* イミド体の活性化自由エネルギー $\Delta G^{\ddagger}_{293\text{ K}}$ は *endo*>*exo* であり、実験結果(反応速:*exo*>*endo*)の傾向と合致した。また、各種二環性ニトロソアミンの基底状態を計算によって調べたところ、*exo* 体のほうが *endo* 体よりも 2°ほど非平面化角が大きい、すなわち単結合性が強いことがわかった。計算により得られたいくつかの遷移状態のなかでも、NO 基がピリジン環側に傾いているもののほうが *endo, exo* いずれにおいても安定であった。この要因としては、NO 基と *exo* 方向の置換基(水素原子かイミド基)との立体障害による不安定化によるものであると考えている。また遷移状態は

S-H から N-NO へプロトンが移りつつ NO が S に近づくものであった。この遷移状態においてプロトン移動と N-NO 結合の解離はどちらが主たる律速の要因なのかを調べるため、Ph₃CSH を Ph₃CSD へと重水素置換したものと、二環性ニトロソアミン **2** を用いて同位体効果を観察した。結果は、チオールを重水素置換しても一次同位体効果は観測されなかった。つまりプロトン移動が主たる律速ではなく、重水素よりも重い NO 基の移動が主たる律速の要因であることが示唆される。トランスニトロソ化反応は S-H からのプロトン移動と N-NO 間の結合の切断が同時に起きる協奏的な遷移状態ではないかと考えている。

光による・NO 放出 ニトロソアミンの N-NO 結合の強度に相関のある n_O-π* の遷移に起因する吸収ピークに置換基・配向性の効果があるかを調べたところ、吸収ピーク変化はほとんど無く (~400 nm) モル吸光係数 ε もほぼ同じ程度の値 (70~100 M⁻¹cm⁻¹) であった。水/DMSO 中 50 μM に調製した各種ニトロソアミン溶液に 420 nm の光を照射し、NO 放出量を測定したところ、置換基の種類や配向性によらずおおそ同じ程度 (~30 μM) であった。また、CBS-QB3 レベルで行った計算によってホモリティックな結合解離エネルギーを求めたところ、いずれの置換基や配向性でもほとんど同じであった (Table 3)。これら計算と実験結果から、二環性ニトロソアミンは置換基・配向性によらずほぼ同じ結合強度であり、いずれも光照射によって同程度の・NO を放出することが分かった。

本研究により、トランスニトロソ化反応の遷移状態は SH から N-NO へのプロトン移動と N-NO の結合切断とが同時に起きる協奏的な遷移状態が強く示唆されることを明らかにした。また *endo/exo* の配向性によるトランスニトロソ化反応の速度の違いは、NO 基の非平面化角に起因することも明らかにした。光分解による・NO 放出は、置換基や配向性によらずほぼ同じであった。これらの結果から、二環性ニトロソアミンは *endo* イミド体と R に大きな置換基を導入した *exo* イミドでは光分解による・NO 放出、R が小さい置換基の *exo* イミド体はトランスニトロソ化反応による NO 供与と、NO 供与の様式を置換基やイミド基の配向性によって制御可能なことを明らかにした。

以上の業績は、薬学分野における有機化学の進展に貢献し、生体反応の理解に必要なモデル反応ともなりえ、メディシナルケミストリー等の薬科学の進歩にも有意に貢献する。よって本論文は博士 (薬科学) の学位請求論文として合格と認められる。